

H27・4・15

第3号

通巻134号

学院通信

発行
金光学院
719-0111
岡山県浅口市
金光町大谷1486
TEL (0865) 42-3115
FAX (0865) 42-3114



他宗教研修 (井山宝福寺)

「霊地」

学院長 堀尾 光俊



いつの頃から、「霊地」という呼び方がなされてきたのか、金光図書館にお尋ねした。

現在確認されている資料上の初出は、明治三十四年九月五日号の『みかげ』紙上にあり、しかもこの記事には「霊地」に「おおたに」のルビが付されている。

さらに明治四十年代の教内紙誌には、「霊地」という呼び方が頻出するようになり、次第に教内に定着していく様子が窺われる。(紀要『金光教学』第四一号より)とのことであり、「この御土地そのものに、このお山そのものに一種言うに言われぬ神々しさを包んでいる。教祖様のご神徳に違いありませんが、よくぞ親神様が、かくも尊く神々しき土地を、神の本社・神の都とお定めになったことよ、どんな人も一度この霊地に足を運ぶ事になれば、それはそれは直ちにおかげを蒙り、いと快活なる身となることが出来ようと思いました」(大正元年の信奉者の「霊地」参拝の感想より)とのこと。

そのご霊地とあるここ大谷の里に、三十七名の神の氏子・全教の宝が降り立ち、お道の教師を志して、金光学院院に入学した昨年の五月より、早くも十一月が過ぎ行き、今卒業の時を迎えた。

教祖様ご生誕二百年、さらには教師養成機関創設百二十周年という、またなきお年柄に入学し、日々教主金光様の御取次・ご祈念をいただきつつ、全教の祈りの中に、共に今日までお練り合わせとお育てをいただいた。

教祖様が日々歩かれたであろう山野、歴代金光様が踏みしめられたであろう境内地、直信・先覚・先師が通られたであろう木綿崎山等々、この祈りこもる聖地「ご霊地」を学院生と共に歩ませていただいた。甚だ不遜な言い方になるが、正直入学当初の海のものとも山のものとも分からぬような人達が、いつの頃からか愛おしく思えてきたのも事実で、彼らも月日と共に少しづつだが確実に変化していった。神の氏子に立ち返りつつ、今お道の教師たらんと力強くその歩みを進めんとしている。これぞ正にご霊地の大きな御徳と実感する。

ただありがたいという言葉だけでは、どうにも足りない落ち着かない、一種のもどかささえ覚えつつも、衷心より御礼申し上げたい。

ありがとうございます。

ご卒業おめでとう

先輩諸師からのことば

北の國から



北海道・留萌教会長
星野 整 師

昭和二十三年秋、当時の学院を了へさせて頂き、帰道に際し、三代金光様に「今の信心で宜敷いでせうか」とお届けお伺ひ申し上げ「はいはい結構です」とのお言葉を頂いて北海道に帰りました。爾來、三代金光様御祈念の内容（金光様―ご祈念の辞）を吾が信心の中心生命と戴き、九十四歳の今日までかつがつも道の御用にお使ひ頂いて参りました。

何うか、各も各もの信心の中に一貫不動の根幹となるものを培って頂くことを願って居ります。別して、一言申し上げさせていただきます。

「人間の脳にだけ備わって居る前頭葉連合部は創造欲、生存欲、所有欲、自己顕示欲等の働きによって今日の文明社会

を創造し文化を継承して来た反面、その競争闘争意識は殺意にまで発展、人間だけが此の地球上で同類相食む殺し合ひを行って来て居る（万有百科大辞典）人間が人間である限り、戦争は止むことも無く、阻止も出来無い。

宗教は―残念乍ら一神教は戦争の元凶たり得ても、平和の救世主とはなり得ない。

「世界眞の平和の御神願成就」具現の道を共々に求めて参り度いと、祈って居ります。



泥の心



兵庫県・小野教会長
安部 悦子 師

ご卒業おめでとうございます。ご霊地の尊いお徳の中で一年間の御修行をおえられ、いよいよそれぞれの立ち場で御用を頂かれることとなり、身の引き締まる思いのことと思います。

これから、お一人おひとりの現場では、様々な事柄が起きてきますが、それにはご自身が求められてのご修行と、思いもかけない神様からさせられるご修行とがあると思います。求められてのご修行は覚悟があつてのことですが、神様からさせられるご修行を「ありがたく受けていく」ということが、信心を進めさせて頂くには肝要であると思わせて頂きます。

「泥の心」という言葉は、今は亡き主人が七年間学院で御用を頂く中で、卒業生に色紙を頼まれた時に書かせて頂いていた言葉です。

この様が嫁がれる際、一子大神様より、「泥の心になって辛抱するように諭された」と安部家にも言い伝えられたお言葉なのですが、まさに起きてくる事柄を「泥



の心」となり受けとめ、ありがたい肥料と辛抱という水やりで人がひとりでも助かる信心を共に、開花させていただきたいと願っています。

かけがえのない学院生活をおえられ、布教者としてお立ちになる今、私共も共にお育ていただきますよう楽しみに祈らせて頂きます。

喜びの日に際して



平成25年度卒業生
香川県・陶教会
藤井 雅孝 師

皆様、ご卒業おめでとうございます。学院を離れ、在学中の日々が非常に尊いものであったということを、ひしひしと感じてくると思います。

入学の日のことを思い出してみて下さい。住み慣れた場所を離れ、知らぬ人ばかりで、少なからず不安を抱いていたのではないのでしょうか。あれから十一ヶ月経った卒業の日、ご霊地という場所、お世話になった方々、一生の友と離れていく寂しさがあるかもしれません。しかし、それよりも希望に満ち溢れ、笑顔で学院を発つて行かれることは、知り合えた者としても非常に嬉しく、心が喜びで満ちております。

私たちは、神様に生かされて生きており、起きている間も眠っている間も、多くのものに囲まれています。それは人であったり、動植物であったり、無機質に見える物であったり、決して一人ではなく、誰かと何かに支えられています。その中で、人間としての役割と自分の役割

を担う訳ですが、和賀心でおらしってもらうことで、周囲と共に生かされていくのではないかと思います。傘一本持って、学院の正門をくぐり抜けて下さい。ここからの御用がありがたさの実感に包まれたものであります様、お祈り申し上げます。

神様と共に



平成25年度卒業生
富山県・神通教会
花田 恵 師

この年の学院にご縁をいただかれ、一年間の修行を無事に終えられましたこと、心よりお喜び申し上げます。

卒業を迎えられた今、どのようなお心持ちでしょうか？うれしくもあり、寂しくもあり、また、これから始まる新たな日々への不安もあるかもしれませんね。でも、その不安も入学当時のものとは違い、どこかに、「きつと大丈夫」という安心した気持ちもあるのではないですか？それは、金光様をはじめ、たくさんの方々に祈られている私たちであり、どんな時も必ず神様が私たちを包み込んで下さっている。そんな絶対的な安心感を、

この一年間で身体に染み込ませてもらったからだと思います。

学院では、今後必要になる共通言語と、修行の「しかた」を教えてもらいました。これからいよいよ本当の修行が始まります。辛いこと、苦しいこともあるかもしれませんが、弱く自分に負けそうになることもあるでしょう。そんな時、学院での日々を思い出しながら、どこにいても、どんなことがあっても、神様と、たくさん仲間達がいることを忘れず、一緒に喜び勇んで神様の御用をさせていただきますね。皆様のご活躍を楽しみにしております。ご卒業、おめでとうございます。



日程

(冬期在籍教会実習後から卒業まで)

12月	29	帰院式
	30	大掃除
1月	5	第七回 求道の日
	6・7	教話実習②
2月	4	他宗教研修 (井山宝福寺)
	15	各種活動選択別研修
	11	他宗教研修 (立正佼成会広島教会)
	12	第三回部屋替え
	16	礼典実習
3月	6	在籍外教会実習
	8	女子・修徳殿入殿
	9	邑久光明園訪問(自主活動)
	11	男子・修徳殿入殿
	13	学院・春季霊祭
	24	第三信心レポート懇談
	25	第三信心レポート懇談
4月	26	天地金乃神大祭御用奉仕
	4	天地金乃神大祭
	12	学院・天地金乃神大祭
	13	身辺整理・大掃除
	14	卒業証書授与式
	15	卒業証書授与式



学院生活を振り返って

学院生の声

人が助かる教会へ



愛媛県・弓削島教会
長井 教開

教会の長男でありながら金光教から目を逸らしてきた私は、正に神様に引き戻されるような流れで長年勤めた会社を辞め、教師を志す事になりました。弓削島は、高齢化、過疎化が急速に進む離島であり、私が後継した後、教会を維持して行けるのか、大きな不安がつきまといました。

学院の課題で、弓削島教会の初代先生について調べ、布教当初は食べる物も無い状態から神様におすがりして立ち行かせていただいたと知りました。この時、神様におすがりして神様の事をして行くのに、教会が立ち行かない事があるかと初代先生から叱責を受けた様な気がしました。また、在籍外教会実習でおかげを受けゆく信者さんの喜ぶ姿を見た時、教

会人が助かりゆく為にある現場だと改めて実感しました。高齢化が進み、先への不安が大きいためこそ教会が在り続け、神様におすがりする場を残さないといけないと思います。何の為に教師になるのか、学院生として守られる中に自覚をいただいた一年でした。

喜び上手な楽しい信心



兵庫県・御立教会
成田 明信

入学した頃の私は神様を信じられず、存在も疑っていました。しかし、入った以上は信心が立派にできるようにしようと思ひ、拝詞集に「楽しい信心」「喜び上手」と書き、信心がわからない中での指針としました。

未信奉者だった妻と共に入学し、妻の体調不良を機に初めて本気で神様に願いました。おかげをいただいたことで神様の存在を確信し、生かされて生きている私であることに気付きました。それから毎日健康のおかげをいただき、様々な気付きもあり、楽しい信心を進めてきました。



辛いこと、腹を立てることも沢山ありましたが、「全て神様の深い思し召しがあつてのこと、私の人間心が悪く取っている」と思ひ、嫌なことでも良いポイントを探して喜びに変えました。

まだまだ未熟な私なので、時には腹が立つし、悲しくもなります。しかし、学院で身につけた「神に心を向ける」ことを忘れず、喜び上手で笑顔の溢れる教師となり、世界を喜びと笑顔でうめつくしたいです。

ここまでの…。これからの…。



広島県・向島西教会
片岡 直子

私は学院入学を直前まで悩みました。正直前向きな気持ちにはなれませんでした。神様を否定し、神様が理解できない未信奉者だった私にとって、学院生活は違和感ばかりで、戸惑いの連続でした。

私には持病があり、不定期に起こる腹痛に悩まされてきました。しかし、今ではほとんど腹痛はなく、症状が出てもすぐに回復できる体につくり変えていただいたのです。初めは形から入りましたが、次第に神様のはからいを感じられる自分へと変わっていたのです。

それ以来、神様はどんな無駄事もされない。そう信じて、どんなに苦しいことがあっても、目を背けず、出来ることから受けていこうと気持ちが変わりました。入学当初、未信奉者という事実に悩みましたが、「そこがあなたの宝だ」というある先生の言葉を信じて、これからより強く神様とのパイプをつなぎ、ご神意からされることなく、自らが助かり、一人でも多くの方の幸せを祈れる教師を目指して参りたいです。

大切にしていきたいこと



佐賀県・相知教会
佐藤 美貴栄

私は入学するまで、自分のことばかり神様に祈ってきました。そんな私に神様は学院生活の中で、人のことを祈ることの大切さを教えて下さいました。

時折体調を崩す同期生に対して、いつも元気な私は、どうしたらいいかわかりませんでした。体調を崩したら、よくなるようにお願いし、元気になるればお礼を申すことの繰り返しでした。でも、同期生がお礼をうけて元気になる、ついついお礼を忘れていて自分がいました。自分自身が楽しく過ごしていると、楽しいことばかりが目がいき、人を祈ることが疎かになっていったのです。

元気なことは当たり前ではないのです。今、私が元気に過ごしているのは、両親、親戚の方々、親教会の親先生、学院長先生をはじめ先生方、そして全教の信奉者の祈りを受けているからだと思つてかされました。卒業後、教師の任命を受けてからも、人に祈られている私であることに感謝しながら、人を祈ることを大切にしていきたいです。

「いままでのまな

■他宗教研修

この研修は、他宗教の教えを学び、その実際に触れることで、宗教の働きを理解する手がかりとし、教師としての使命と役割を確かなものにするを願って実施している。本年度は、一月十四日に



立正校成会

井山宝福寺、二月四日に立正校成会広島教会を訪問した。

宝福寺へは黒衣に素足で入山し、火の気のない禅寺修行を体験した。ご住職の法話を拝聴し、座禅修行に取り組んだ。

立正校成会広島教会では、「開祖さまご命日」の式典へ参列し、読経供養や体験説法、車座になり悩みや問題を語り合う法座を体験した。その後、教団の概要説明を拝聴した。

他宗教の信仰に触れ、自身の修行姿勢を見つめ直すとともに、現代社会に貢献する宗教者としての生き方に尊い示唆をいただいた。

■各種活動選択別研修

一月十五日から二月六日の期間、卒業後の御用に資することを願いとして、各自の関心に沿って、三つの研修の中から選択する「各種活動選択別研修」を本年度も実施した。本年は、最終日に全体で活動内容を報告する場を設け、研修内容を共有した。

■青少年育成(十九名)

青少年の特性や、育成における基本的な知識・技能、教会における育成活動の願いと、その実際について講義で学んだ。そして、集会実習、野営実習、ハイキングなどの実習を行った。



霊地少年少女会の新春餅つき



「菩提樹」との交流会

■奉仕活動(十三名)

特別養護老人ホーム「寿光園」、障がい者支援施設「あお空」や共同作業所「菩提樹」を訪問した。今まで目を向けていなかった世界を目の当たりにして、「皆、神の氏子である」など、大きな示唆を得たと思われる。

布教・教義研究 (五名)

神観、人間観、教祖観、布教など各自の問題意識に基づいて、研究テーマを設定し、自らの信心を見つめ直すべく、レポートにまとめる研修を進めた。



レポート検討会

■ 礼典実習

二月十二日から十六日までの五日間の日程で礼典実習を行った。前期の「祭式」及び「祭詞」の授業において、礼典の基礎的な素養を習得し、それを踏まえ後期の礼典実習では、四グループに分かれ、葬儀式、結婚式、地鎮祭、交通安全祈願



地鎮祭

祭の祭典実習に取り組んだ。卒業後の御用も視野に入れ、それぞれに、想定をしつかりと決め、実際に祭服を付けて実習に皆が真剣に取り組んだ。また、祭詞ゼミでは、それぞれが、作成した祭詞を奏上し、内容を検討した。実習後すぐに実施された在籍外教会実習で、実際に月例祭や、葬儀式、宅祭等の御用に当たり、礼典実習で取り組んだことが活かされたとの声も多くあった。

■ 在籍外教会実習

在籍外教会実習 (二月二十日～三月三日) は、本部広前の修行生として、在籍教会以外の教会活動の実際に加わり、教

会長の信心や教会現場の布教姿勢に触れることを通して、学院で培った自らの信心・求道姿勢を吟味し、卒業後、それぞれの道を進む上で、自己の役割を明確にすることを願いとして実施している。

出発前は皆、緊張の面持ちであったが、十二日間の実習を終えて帰院し、それぞれが自分にとって最良の実習先を神様が選んでくださったと感じたようである。

実習先の教会現場で信心に触れ、多くのことを学び、気付き、そして、それぞれが卒業後の自らのあり方について、様々な示唆を得たようである。

■ 「邑久光明園」訪問

「学院生活の願い」にある「人間のあらゆる問題を信心の眼で見る力を養」うことを目的に、ハンセン病の国立療養所「邑久光明園」の訪問を始めて二十一年目の今年も、三月九日に希望者十一名と引率職員四名で訪問し、研修をした。この園には、「金光教求信会」があり、他の教団施設と並んで立派な会堂があり、毎月の月例祭と春秋に靈祭、大祭が岡山県の先生方によって、仕えられている。

午前中は、信奉者の榎本初子さんから、ご自身の体験談を聴かせてもらい、午後には、昨春に就任された石田裕園長から「ハンセン病問題と私たち」と題して、スラ

イドを交えながら講義を聴き、ハンセン病の正しい理解と誤った政策により差別と偏見で多くの方々々が苦難な生活を送らざるを得なかった歴史を学んだ。



園長の講義



納骨堂参拝